

黒い力と白い願い(Ⅱ)

—W・スタイロン,「ナット・
ターナーの告白」—

安部大成

Ⅳ

W・スタイロンの小説には人種主義者感情が一貫して流れ、奴隷反乱の主動者、ターナーの反乱動機を求め、表現する過程で、二つの形態を取って表われている。一つは社会的恐怖、他は心理的(個人的)恐怖のそれである、と前回に述べた。

この二つの恐怖は、現代アメリカの白人社会のそれであって、時代と舞台とを約百年ほど前に取って表現されたものが、この小説である、と考えることが出来る。

スタイロンは、社会的恐怖を恐ろしきで表現してはいない。だが、名目上の弁護士であった実在の人物、トーマス・グレイの口を借りて、法廷の傍聴者達に、この反乱は心配されるべき性質のものではない、安堵せよ、と訴えるところに、逆説的に恐怖が現われている、というのではない。こうした言動は社会的恐怖を鎮めるべく、当時の治安関係者や奴隷制権力側のジャーナリズムが行った訴えの再現⁽¹⁾とも考えられ、それが現代の、反人種主義(それは反帝国主義、反植民地主義と一本のロープのよりの如く一体化しているが)斗争を恐れるアメリカ白人社会への精神安定剂的訴えと見ることが出来るにしても、白人作家スタイロンの独自性を発揮した恐怖とは思われない。

彼の独自性が発揮されるのは、黒人奴隷制度という人間家畜化制度とそれを支える精神的支柱である人種主義（白人優越・黒人劣等主義）に挑戦した、ターナーの解放斗争の動機を抹殺し、また起自然主義的理念、奴隷制度打倒のために神が介入し給うという、変革の宗教理念を骨抜きにする、いわばこれなしにナット・ターナーは存在しないといえる彼の本質的なものの解体処理作用の中に於てである。

彼のこの小説は、I Judgment Day, II Old Times Past, voices, dreams, recollections, III Study War, IV “It Is Done...”の四部から成る400頁余りのもので、この構成とプロットを見ると、彼が解体処理せんとする社会的恐怖と心理的恐怖の実体が何であるかが分り、また、如何なる神話を作らんとしているかが明白になる。

まずIのタイトル、Judgment Day そのものが問題である。ターナーはバプティスト派の説教師であり、キリスト教の一セクトの予言者でもあった。民衆興起、大信仰覚醒運動の時代に育った彼が、自任説教師となり、自ら予言者と信じ得たのは不思議なことではない。彼は彼流に聖書を解釈し、幻想を抱き、神の言葉を聞き、白人奴隷主を襲った。この世の白いサタンと対決するに至った彼の宗教は、素朴であれ不正と戦う反逆の宗教なのであって、彼は神の裁きの日に備えて、サタンに挑んだことが「ナット・ターナーの自供書」に語られている。神の裁きの日とは奴隷制度瓦解の日なのであって、Judgment Day は地上的にいえば解放の日を意味した。スタイロンはこれをターナー判決の日、つまり、白人社会がターナーを裁き、死刑を科した日という意味に使っている。内容は裁判を待つ拘留中のターナーの心境と回想、トーマス・グレイとの対話、法廷におけるグレイの事件説明、そして判事ゼレミヤ・コブによる死刑判決をうけた後のターナーの心境を述べたものである。

このIはIV “It Is Done...”と呼応してスタイロンのターナーの解体および復元が行われる。グレイとの対話は「自供書」を取る形で始まるが、重要

なのは両者の宗教論争である。グレイは無神論者として登場し、鎖で縛られたターナーに一方的に論戦し、天体学や哲学を充分に使ってターナーを困惑させる。これがターナーが神に見捨てられ、虚無感に襲われているという設定の中で行われているので、意図されていることは明らかである。ターナーより宗教を、つまり彼の変革の宗教を奮い取ることにある。これはターナーの回想の中に18才の白人娘、マーガレット・ホワイトヘッドが常に現われ、彼に絶望的なあこがれをいだかせるという設定と表裏一体になってさる。それは“*It Is Gone...*”で明白になる。宗教を除去され、神に見放された彼の心の空洞に、白人娘の甘美な声がする。マーガレットという白人女性を通じて、ターナーは神の存在を再び感じ、安堵してこの世を去る。

一見して、白人の黒人に対する家父長的温情主義の現われに見えるが、事実は奴隷制度と白人支配の抑圧をはねのけんと戦い挑んだナット・ターナーの解放精神を去勢し、白人女性にターナーを屈伏させて、黒人の力を腰くだけにし、白人優越・黒人劣等主義という人種主義の勝利をかかげんとするものである。

マーガレットは反乱の際ナット・ターナーが剣で切り殺した唯一人の人物である。何故この一人だけであったかは、「自供書」が明らかにしている。ターナーを含めて、僅か5名で行われた反奴隷制暴力斗争に、他の奴隷が加って40名の集団になり、散在する白人奴隷主の家を攻撃したので、人数が分散した。彼はこの間の指揮を取っていて、直接相手を倒す機会を持っていなかった。彼にはウイルという屈強な部下がついていて、斧を振って白人をなぎ倒していた。ターナーは指揮者として剣を手にしてしたが、この剣の刃が鋭くないので相手が倒れない。手こずるところをウイルが一撃で処理した。結局、マーガレット一人が倒れたわけである。

スタイロンはこの一人の娘に目をつけ、ターナーの反乱は、この娘に対するターナーの片恋と私恨に原因するものとした。この私恨なるものをスタイロンは黒色人種劣等という意識から生じたものにし、反乱の動機づけにして

いる。つまり、ターナーは白人娘の心と白い肉体に魅了され、欲望するが、自分の肉体が黒いという人種差異の前に絶望し、この内面化された白人優越・黒人劣等主義がブレーキとなって、身体のおれ合うところにいるマーガレットと現実的な、満足されるべき人間関係を成立させられない。このために生ずる激怒、苦悩が現実否定、つまりマーガレットを含む地域の白人殺害へと彼をかり立てたとしている。II Old Time Past と III Study War はこの動機設定の部分であるが、これは白人社会の心理的恐怖、特に黒人男性と白人女性の関係にまわらるそれを露提している部分であるので、この面は後に廻し、社会的恐怖を露提している I と IV を検討していきたい。そのために、ターナーの反乱があった1831年前後のアメリカの宗教思潮、宗教感情を管見し、ターナーの「自供書」をとり上げ、I Judgment Day と IV “It Is Done...” にもどることにしたい。

註 (1) ターナーの反乱は1831年8月21日の夜開始された。8月23日付の *Richmond Whig* は大した危険性は認められない、と書き、8月26日の *Richmond Enquirer* はこの地域の人々は平穏に暮しており、誰一人としてそうした反乱がヴァージニア州の一角で生じたなど夢にも思っていない…と書いた。

だが二週間後の *Enquirer* は女子供の生命の安全を如何に保障すべきか、一応警戒すべきであると論じている。いづれも世論を安心させんと努力している。Herbert Aptheker, *Nat Turner's Slave Rebellion* (New York, Grove Press, Inc., 1968) p.p. 58, 59.

だが、実際は人心を恐怖に落した。それは当時のこの地域の社会、経済状況が不安なものであったことも加って、病的にまで激しいものであった。この恐怖感にはヴァージニア州全体からデルウェア州、フロリダ州、ルイジアナ州、ケンタッキー州へと拡がった。ヴァージニア州の或る人がオハイオ州の友人に書き送った手紙によると、この反乱の恐怖で彼の妻は気を病んで健康を害し、自分も不安のためこの三ヶ月夜も満足に眠れない、二人は夜、聞き耳を立ててすごすことがあり、木の葉のすれる音、豚の泣き声が恐しく、居間にいる猫がはねただけで驚いて目が覚め、その夜はもう眠ることが出来ぬ、という主旨のものである。治安関係者や行政担当者は神経をいらだたせ、奴隷地域のパトロールが強化され、市民は武器を身につけて床についている。

H. Aptheker, op. cit., p.p. 57, 64, 66.

- (2) *The 1831 Text of the Confessions of Nat Turner...as reported by Thomas R. Gray in William Styron's Nat Turner edited by John Henrik Clarke (Boston, Beacon Press, 1968) p. 107.*

V

「1800年という年はアメリカ奴隷制度にとって、致命的な年であった。ジョン・ブラウンが生れ、ガブリエルの反乱が起り、ヴィジイが自由の身になった年であり、さらにナット・ターナーが、この年の10月2日に生れたのであった。」とハーバート・アプティカー Herbert Aptheker は述べている。1800年がそういう年であるなら、ターナーが反乱を起し、処刑された1831年の前後数年は、奴隷制度を暴力によってでも倒さなければ、神の教えに叛くものだと叫ぶ戦いの黒人説教師の現われた時期でもある。

ナサニエル・ポール Nathaniel Paul は「1827年7月5日ニューヨーク州奴隷制度廃止を祝う演説」*An Address Delivered on the Celebratim of the Abolition of Slavery in the State of New York July 5, 1827* で、若し彼が奴隷制度を破壊することが出来ないものと思ひ込まねばならなくなったとすれば、彼は国の法律には従わず、地上の生活に神の教えは関係ないものと否定し、牧師を最低の人間とみなし、聖書を虚偽と幻想の作り話と考えざるを得ない、と述べ、キリスト教は奴隷制度廃止と一体化されたものでなければならぬこと、これがなし得なければ自らを否定し、葬りたいと、真剣な反奴隷制態度を取っていた。1829年にはデヴィット・ウォーカー David Walker (1785—1830) がパンフレット *Walker's Appeal in Four Articles Together With a Preamble to the Colored Citizens of the World, But in Particular and Very Expressly those of the Nited States* を出版し、奴隷制度廃止のためには暴力をもってすべきであり、それが神の意志である、と説いた。

1829年はヴァージニア東部沿岸で奴隷反乱の噂が流れており、ジョージア

州オーガスタで大火災が生じたりした。そして同州サヴァナの奴隷達の間にはウォーカーの *Appeal* のコピーが渡っているのが発見された。ウォーカーは自由黒人で当時ポストンに住んでいたため、サヴァナの市長はポストンの市長に対して彼の逮捕を求めたが拒否された。南部では奴隷の反乱、陰謀、抵抗を生じせしめるうたがいのあるパンフレットの出版、所有を禁止するばかりか、奴隷に読み書きを教えることを禁止するに至った州があったほど、この時期の南部は社会不安にみちていた。⁽²⁾ 1825年南部綿生産州には綿の生産量が消費量をはるかに上廻り、綿の価額は約55%落ちて不況に見舞れ、こうした状況が1829年まで続くことになる。これは奴隷市場を持つヴァージニア州に深刻な影響を及ぼした。1825年には奴隷価額が底をつき、綿価額の低落と共に1829年まで続き、低南部諸州へ奴隷を供給していたヴァージニア州に奴隷が多数集積されることになった。⁽³⁾ そして地域的には奴隷人口が白人人口を上廻った。⁽⁴⁾ こうした中でウォーカーは当然危険人物とされ、彼の逮捕には生きたままで一万ドル、殺して一千ドルの償金がかかっていた。⁽⁵⁾

この翌年の1830年にはフィラデルフィアの黒人教会、ベセル・アフリカン・メソヂスト・エписコーバル教会で、第一回黒人全国大会が開れ、黒人教会を通しての、黒人地位向上の運動は北部で盛んであった。1831年の第二回大会はウィリアム・ロイド・ガリソン William Lloyd Garrison (1805—1879) が演説した。

第一回黒人全国大会の会長に選ばれた、リチャード・アレン Richard Allen (1760—1831) はメソヂストの監督で、アブサロム・ジョーンズ Absalom Jones と共にそれ別個に最初の独立した黒人教会を創設した人である。彼等は1787年、フィラデルフィアの白人教会、セント・ジョージズ・メソヂスト・エписコーバル教会で礼拝中、白人席にいたことを理由に追い払われた。人種が異なるという理由で神への祈りの場所を隔離する白人教会の人種差別主義に怒った彼等は、白人教会の差別主義に加担する必要のない、黒人独自の教会設立の必要を痛感し、寄金を集め、7年後の1794年にフィラ

デルフィヤにそれぞれの黒人教会を築いた。これ以来、1800年代の初めまでに、北部には黒人教会が多く誕生し、これが黒人運動の基盤になっていった。

このように1830年前は人種差別主義や奴隷制度に対決する牧師や説教師が盛んに活動したが、彼等は自由黒人であり、北部にあって、たとえ妨害はあっても、学識を育てる機会や行動に大した制約はなく、理論的、神学的に奴隷制度や人種差別主義に対決し得た。

これに対して、南部奴隷制度下に、奴隷として生きることを強いられた説教師、ナット・ターナーは北部説教師の持つ、社会生活面での権利、その保障、様々な機会には浴しなかった。

南部には黒人教会は極めて少なかった。「大多数の黒人は、自分たちの主人といっしょに礼拝するか、〈確実〉な白人によって厳重に監督された自分たち自身の教会で礼拝した。⁽⁶⁾

そのため説教は大変注意深く行われねばならず、戦斗的説教は期待することは出来ぬ。説教は黒人霊歌が持つと同じ、二重の意味を含んだ言葉で行われた。この世は「地獄」のように苦しく報いのないものであり、「天国」での幸福をひたすら希望しよう、と説く他界的説教は「奴隷制度」という地獄を脱し、「自由の地、北部」という天国へ向わんとする訴えであった。こうした二重説教を奴隷がよく理解し得たのは、奴隷生活そのものが、日常の抵抗という生活形態を取っていたためである。白人の下位に自らをおいて、彼等をだしぬくという演出的行為、無知を装って労働作業の能率をおとし、仮病をつかって身体をやすめ、故意の失策で作物を傷け、熱心さを装って力まかせに具器を破損させる抵抗が行われていた。こうした根ばり強い抵抗から、収穫物への放火、奴隷制よりの逃亡、さらに反乱といった積極的な、過激な行動による対決が行われもした。⁽⁷⁾ 説教師よりも、反乱主動者が南部白人奴隷社会を動揺させていた。

1800年の夏、ヴァージニア州ヘンリコ郡で約1000人の奴隷を組織し、リッ

チモンド市に向ったガブリエルの反乱があり、また1822年、南キャロライナ州チャールストンで自由黒人デンマーク・ヴィジイが企てた大暴動計画がある。いづれも裏切りによって未然に鎮圧され、主動者をも含めて、各々30数名の奴隷が処刑された。

大反乱で成功したのはナット・ターナーのそれで、この反乱計画、準備は異質なものであった。

「ターナーの行動は旧約聖書の彼流の解釈と彼が奴隷達を捕囚の家から導き出すべく、神によって選び出されたその媒介者であるという信仰心によるものであった。ターナーの反乱準備は多数の奴隷を要員として徴集することより、むしろ祈りと天から指される印を待つことにあつた。⁽⁸⁾」神の声を聞き、幻を見、神の裁きの日が近づくのを感じて白い悪魔を倒さんと立ち上った説教師ターナーのこの異質にみえる発想はこの時代の宗教思潮に特に現われた至福千年の望みと深く関係している、と考えられる。

1800～1830年は一般大衆が政治に参加しようとする意欲を強め、選挙権が拡大されて、「一般大衆の代表者」であると名乗る、ジャクソンを1829年大統領に選出し、従来のジェントリーであり、上層階級出身者であるものが占めたこの地位を庶民の代表者に占めさせた、民衆興起の時代である。

これは宗教界においても同じで、この時期に既成教会の力が衰え、民衆の力による新興教団が伸び、「プリースト(司祭)やミニスター(牧師)指導の時代から、プリーチャー(俗人説教師もしくは自己任命の説教師)時代⁽⁹⁾」に移行して行く。

俗人説教師が輩出し、アメリカ・プロテスタンティズムを既成教会より切離し、決定的に民衆の宗教たらしめる契機を作ったのは、この時期の、第二期大覚醒運動と呼ばれる、野外集会を通して行われた宗教伝道である。この伝道は、福音主義に基づく宗教伝道であって、その集会、伝道方式と共に民衆の心をよく把握し得た。

野外集会は、はてもなく拡がるアメリカの広野に、散在して生活した人々

にとっては人間交歓の稀れな機会を与えた。野外礼拝の予定された地に、人々は幌馬車に乗り、馬を馳って集まった。大自然の中に孤独感を味わいながら、自主独立、奮闘して暮して来た彼等はこの人間の集団接触の中に、日頃の緊張感、制禦感を解き放ち、自由な感情と人間同志の接触を欲び酔いしれた。男女の解逅、談笑、音楽、合唱と群衆の感情は高まってゆく。こうした集団のところへ、俗人説教師、自任説教師達が、徒歩、騎馬で訪れて来る。彼等は既成の牧師や司祭、教会の伝統におさまらない、生活体験豊かな、セルフメイド・マンであり、全く新たな宗教人であった。野外集会地に集った群衆は、当然のこと、知的説得よりも感情を充実させ、身を奮起させる、体験的説教に、神学的訴えよりも福音的訴えに深く感応した。説教師は熱弁をふるって、罪びとに警告し、悔いて神の救いの手を迎えよと叫んだ。群衆は声をあげて応じ、力強い福音主義の訴えに、彼等は一体化した人間集団に結び合わされ、帰属感に酔った。

「神は彼等のまっただ中に⁽⁹⁾給いて、人々の心にその御手をさし入れ、悪を清め出されるように思われた。」

こうした野外集会に集った人々の中から、新たに説教師が生れ、指導者が発見され、また地域の代表者が扱ばれて行った。大覚醒運動は、従って民衆の相互援助、情報交換、パーソナルコミュニケーション、利益代表者扱出の場ともなった。

この時代の宗教的特質は、福音主義の強まりと共に宗教思潮の中によみ返った、至福千年の望みであって、ラルフH・ガブリエル Ralph Henry Gabriel はこの大覚醒運動は「至福千年の望みを照し出す野火」⁽¹⁰⁾であった、と見ている。

至福千年 Millenarianism⁽¹¹⁾の基本的な考えはキリストがこの世に再臨し、悪魔は神の手で奈落につながる、そしてキリストはよみがえった聖徒と共に、一千年間この世を治められる、というものであるが、この超自然的な考えには、地上の悪魔的なものの追放の願い、厳しい自然条件、充分でない

経済条件の中での苦しい生活を一拳にはねのけたい、という民衆の現実的願いが反映されていた。

『『至福千年期はいつ始まるのであろうか?』とマサチューセッツの牧師であり、学校長でもある、コンコードの起絶論者のいとこ、ジョセフ・エマソン Joseph Emerson は1818年に自問し、『この時代のきざしは、至福千年期に入る日が近づきつつあることを告げている。』と答えている。⁽⁶³⁾』

大覚醒運動の中から、自己任命の俗人説教師達が出現した如く、この時代の至福千年の願いを担った自己任命の教組も現われた。

1820年、ニューヨーク州の森の中で幻を見み、この体験をもとに1830年、6名の会員と共に教会を設立した、モルモン教の教祖ジョセフ・スミス Joseph Smith (1805—1844) の周辺に信者の数が増し、1840年の初めまで彼は信者と共にオハイオ州、ミズリー州、イリノイ州を移動し、教えを拡げていた。また、セブンスデー・アドヴェンチェスト派の先駆者となり、ミライズムの教祖となった一農夫、ウィリアム・ミラー William Miller (1782—1849) は1831年、マサチューセッツ、ニューヨーク、ヴァーモント各州で、キリスト再臨を説いて廻った。彼はダニエル書と黙示録の独自の解釈により、この世が終る年を計算し、その年を1843年と予言した。この予告は野外集会にも反響を及し、説教者達は遅すぎぬ内に悔い改めることを人々に訴えた。このミライズム派は急速に信者を増加させ「1843年までに信者は百万人を数えた。」⁽⁶⁴⁾

そしてこの年、1843年に大彗星が地球近くに迫ったため、その彗星の尾は白昼にもはっきりと見ることが出来た。⁽⁶⁵⁾ この天文学上の出来事は、地上の生活を苦しいものにする社会不正、富による人間不平等、その圧迫、残存する教会権威等への反撥感から、これら一切が崩れ去り、その後を生ずる新しい時代と世界を祈念するあまり、至福千年の望みに感應していた人々を畏怖させるに充分であった。その彗星の尾は不正の世の終末を明示するかの如く、「罪ある世の上にふりかざされた剣の如く、白昼大空にかかっていた。」⁽⁶⁶⁾

大覚醒運動によって広まった、プロデスタンティズムの福音主義的要素、

つまり個人の信仰心を重要視し、キリストを通じて、神意に服し、救済にあづかるという考えが、この世の終りとキリスト再臨の望み、つまり至福千年への望みに向って行ったのは、信仰覚醒がもたらした、現実に対する宗教的非妥協の姿勢にあるのであろう。

この世の一切が終り、キリストが再臨する、悪魔は地上より追ひ払われる、キリストが支配する新しい世界が来る、という超現実的の展望には、現存の不正と弊害を生み出す体制を一挙に破壊し去りたい、という深刻な願いが含まれていたところを見逃してはなるまい。

ナサニエル・ポールは正義の神がこの世に必ず介入される筈であるのに、また神を信じ救いを待っている多勢の奴隷がいるのに、何故、彼等を放置したまま苦しめられるのか、とヨブの如く焦燥し苦しんだ。

デヴィッド・ウォーカーは神のことばをもって、アハブやイゼベルの王権に勇敢に対決した予言者、エリヤの如く怒りにみちていた。エリヤはモーゼと同じく、神は戦斗的、爆発的なもの、暴力をもってこの世に介入してくるものだ、という信仰が強かった。

彼等黒人説教師に、暴力の神の介入と、神の意志を受けて行い戦いを叫ばしめたのは、彼等の政治、社会政策の欠如や常識程度の科学的知識の不足を意味するものではなく、いわんやアナクロニズムをも意味しない。彼等は現実に横行している人間の家畜化という恐るべき制度に挑戦する怒りの心を民衆の間に誘発させんとしたのであった。

ここに、H・B・ストウ Harriet Beecher Stowe (8111—1896) が奴隷制度を支え、またこの制度が生んだ、恐るべき奴隷所有者側のモラルを証明しようと集めた⁶⁾1830年代から1850年代の南部奴隷諸州の新聞広告のうちから二つを拾ってみよう。

「逃亡。5月15日当方よりファニイという黒人女が逃亡。20才。背高く、読み書き可能、従って巧言にたける。……赤表紙の聖書を持逃げ。信心深し。よく礼拝し、満足気で幸福そう。頭髪直毛、眼色青。白人女として通過

可能。捕えて当方に差し出した方に 500 ドルの報酬あり。……1845年 5月 29日、ジョン・ブラッチ⁽⁹⁾」

20才の混血奴隷に 500 ドルをかけて捕えんとするのはこの白人奴隷主の夜の慰みものとして保管したいためであろう。混血奴隷の起源は白人男が自由を奪われた黒人女を犯して産出したものであり、その中で白人に類似した奴隷を家内労働に使った。一般に女は召使いという名目で白人男のセックス相手に使われた。

このファニイという変な名をつけられた若い女は凌辱の中に自らの人間性を墮落させることなく自由の身であらんことを求めて逃亡した。一冊の聖書を手にも、追手を逃れて北部へ向う若い女。これに償金⁵⁰⁰ドルをかけて網を張る奴隷主。

少し時代がさがるが、1852年12月の *New Orleans Picayune* に出た広告を見よう。

「償金20ドル。下記の農場より黒人男、説教師、シェドリック逃亡。5フィート9インチ、40才ぐらい。……胸にN・Eの印があり、両足の小指が切断されている。色黒く、眼は小さいが輝かしく、態度はおうへい。……逃亡し……捕えられた経験あり。……セント・ジェイムス教区、アーマント・ブラザーズ社……」⁽⁹⁾

説教師の胸に焼ゴテで印をつけ、足の指を切り落して逃亡の罰、再逃亡の際の目印にする社会を想像すれば、北部説教師や牧師が神が暴力をもってこの世に介入することを求め、その御心に応じて暴力をもって立ち上ることを奴隷に訴えたのは、奴隷制度という暴力制度を神という次元の異ったものの暴力で崩さんとした、いわば暴力体制否定のための暴力を主張し、人間性の墮落を阻止せんと願ったためであろう。

註 (1) Sterling A. Brown, Arthur P. Davis, and Ulysses Lee eds., *The Negro Caravan*, VI. Speeches, Pamphlets and Letters, (New York, Arno Press and The New York Times, 1969) p. 577.

- (2) Ibid., p.p. 587-588.
- (3) Herbert Aptheker, op. cit., p.p. 7-9.
- (4) Ibid., p. 13.
- (5) *The Negro Caravan*, op. cit., p. 587.
- (6) J. H. コーン著, 大隅啓三訳『イエスと黒人革命』新教出版社, 180頁。
- (7) Benjamin Quarles, *The Negro in the Making of America*, (New York, Callier Books, 1968) p. 76.
- (8) Ibid., p. 82.
- (9) 井門富二夫, 「空間的社会—アメリカ」木村尚三郎, 赤井彰, 井門富二夫著『告白と抵抗, プロテスタント』淡交社, 183頁。
- (10) Ralph Henry Gabriel, *The Course of American Democratic Thought*, (New York, The Ronald Press Company, 1957) p. 33.
- (11) Ralph Henry Gabriel, op. cit., p. 35.
- (12) 千年至福説(千年王国説)ともいう。参考のために、日本基督教協議会文書事業部, キリスト教大事典編集委員会企画・編集『キリスト教大事典』教文館, 658-659頁の山谷省吾解説を引用すると「ヨハネの黙示録 20 : 2, 4, 7 を出所とする神学学説。世界の終末において, 神は悪魔サタンを捕えて千年の間つなぎ, 底知れぬ所に投げこみ, 入口に封印をして地上に現われることを禁ずる。その期間生きかえった聖徒たちがキリストとともに支配を続ける。この千年の至福の期間が過ぎると〈サタンはその獄から解放され〉(黙20 : 7), 諸国民を集めて, 聖徒たちに対して戦を挑むが, 〈天から火が下ってきて, 彼らを焼き尽し〉, サタンは火と硫黄との池に投げこまれ, 世は限りなく苦しめられる。その後, 万民の審判が行われ, 命の書に名を記されていない者は火の池に投げこまれ, 記されている者は, 天国の民として祝福の生涯を送る。(20 ; 7—15)。これが終末の審判であるが, 千年の至福期は, それに先立つ千年の期間において実現する。この期間にイエスをあかしした聖徒たちは, 地上においてイエスとともに支配し, その祝福にあづかることが出来る。……信仰覚醒が行われ, 再臨説が強く主張されたところでは, どこでもこの千年至福説が信じられた。……」
- (13) Ralph Henry Gbariel op., cit., p. 35.
- (14) Merle Curti, *The Growth of American Thought*, (New York, Harper & Row, 1964) p. 303.
- (15) Ralph Henry Gabriel, op. cit., p. 36.
- (16) Ibid., p. 36.
- (17) Harriet Beecher Stowe, *The Key to Uncle Tom's Cabin* (1854), (New York,

Arno Press and The New York Times, 1968) p.p. 346-364

(18) Ibid., p. 363.

(19) Ibid., p.p. 347-348.

VI

トーマス・グレイがナット・ターナーから取った「自供書」にどの程度グレイが手を加えたか（グレイはそうしていないと断っているけれども）、またターナーがどの程度まで本心を語ったか不明であるが、グレイがこの自供書に書き加えた所感、「……ぼろをまとい、鎖を身体にかけられていたが、人間わざとは思えぬ気迫を秘めて、拘束された両手を天に向けて広げんしたりする…… この男を見て私は身の毛がよだつ思いがした。」はターナーがためらうことなく信念をもって、整然と語ったことを示し、多くの真実がこの書に残されていると考えて間違いあるまい。

ここに、白人奴隷主達の生命を奪う行動に彼を向わしめた彼の宗教体験、これには当時のキリスト再臨、至福千年の考えが如実に反映されているが、こうした宗教体験へと彼を導いた要素となるものを取り出してみよう。（これは自供書の約半を占めている。）それはW・スタイロンをして、ターナーから宗教を抹殺せんとさせるのは何故か、を考える大きな手がかりとなろう。（トーマス・グレイがまとめた *The Confessions of Nat Turner*,………は John Henrik Clarke ed., *William Styron's Nat Turner*, Ten Black Writers Respond (Boston, Beacon Press, 1968) に収録されたものを利用する。）

「子供の頃に、私の心にぬぐい去ることの出来ぬ影響を及ぼし、自分はそれを処刑台でつぐなうことになったが、白人黒人相方の多数を死滅させて終ることになった、この法悦の素地となる出来事があった。」

「三、四才の頃、私が遊び仲間になんか話しているのを母がふと耳にして、その事は私の生前にあったことだといった。私は当惑して何かいうと、これは母の指適を確かにするものであった。呼び集められた人達は非常に驚いて、神が私に生前のことを示されたのだから、私はきっと予言者になるのだろう、というのを私は聞いた。」

この感銘を初ず強いものにしたのはターナーの父母で、「私が何か偉大な目的を遂行するよう、定められている」と語って、私の胸と頭に出てくるイボをそのしるしだと指適した。ターナーはこのイボは子供達によく出来るもので、別に予言者のしるしとは考えていなかった。彼はむしろ自分の頭脳が人並以上に鋭いものであると自覚させられた事の方に、子供としては関心があったらしい。

「私の祖母……主人……主人の邸に来る信心深い人達……は私の振舞いが特異であるのと……子供の割には並はずれて利口であるのに気づいて、私は分別がありすぎるから、このままでゆけば奴隷の身で他の人につかえることなどあるまい、と評した。」

利口であった例え話に、

「家族のものが驚いたことには、或る日、私が泣いていたので、泣きやまそうと本を見せると、私は本にない他のものの名前を綴り始めた。」

というのがある。彼は「アルファベットを学んだ記憶がないが」読み書きに秀れていた。恐らく苦勞して憶えたことではなかったので、記憶にないのであろう。

彼の利口さは、近所の黒人達を驚かせ、ものごとを非経験論的に判断する人々や、信仰心のあつい人々の間で、何か超自然のかかり合いを持つものと思われたらしい。成長してからも、この明敏な頭脳は働いて、

「主人の仕事に費される以外の時間は、祈りにささげるか、或は土で作った鋳型にものを流し込んで実験したり、紙、火薬を作る実験などをした。」

この実験を完成させ、実用化出来なかったのは手段、材料がなかったため、あれば可能であった、という彼の真偽をたしかめるべく、グレイは改めてターナーに尋ね、自供書に次の様な脚注をつけている。「これらのものを製造する方法について質問されると、彼は充分な知識を持っていることを示した。」

1846年に自由黒人、ノバート・リリュ *Norbert Rillieux* が Vacuum cup を発明し砂糖精練法に大改革をもたらした、⁽¹⁾ といった例があるが、あくまでこの人は自由黒人の中でも恵まれた地位にあった人である。こうした種類の科学発明を念頭におくよりも、自由黒人の職業とそれに課せられた制限⁽²⁾ を考えるならば、奴隷であったターナーはこの方面にその才能を伸す機会に浴していなかったのであろう。また、奴隷制に反逆するに至った彼を考えれば、彼の才能はむしろ、宗教感覚の面で鋭いものとなっていったのは納得出来よう。注意すべきなのは、彼の宗教感覚は、教会という体制化された世界で充実され、発展されるのではなく、体制と相入れぬ、いわばセクトの場で充実され、彼を現状打破の予言者と任ずるに至らしめるものであった。

ターナーの家族、その隣人、彼が仕えた主人、つまり彼の自意識を形成する上で重要な役割をはたす社会グループは信仰心に富む人々によって構成されており、これらグループの人々が、ターナーの非凡な才能を宗教的なるものと結びつけたり、そういった方面に於て育つよう仕向けことは大いにあり

得ることである。

「祖母、彼女は非常に信心深く、私が大変なついていた人であったが、」

「私の主人、この人は教会に所属していた、」

「主人の邸に来る信心深い人達、この人達が祈りをささげる姿をよく見かけたが」

これらの人々が幼少のころのターナーの頭脳のよさを認め、将来、奴隷として他の人につかえることはあるまい、といい、また彼の父母や隣人が、彼の頭脳のよさは神によって与えられたものだと考え、何か偉大な目的のために生れて来た者として彼と人間関係を保ったことを考慮すれば、彼が自己任命の説教師となる道を択び、その過程で、偉大なる使命感をもつに至るのは納得し易い。しかも、時代はまさに信仰覚醒の時代であった。

「自分は偉大なるものになると気づき、またそうあるべきだと思ったので、私は他の人々と混り合うのを避けて、断食と祈りに身を捧げて、神秘の世界に身を隠した。」

彼は彼を取り囲む世界の人々が、口をそろえて彼を択ばれた者と定めることに半信半疑であったが、心を落ち着けて、よく思案した。その思案の仕方が断食と祈りという宗教儀式の型を取ったのは、それが、彼の住んだ奴隷地域社会の文化に規定されるところが多いのではあるまいか。

「この頃、或る人の邸宅に行き、そこに集った人々の間で聖書の一部が解釈されているのを耳にしたが、特に Seek ye the kingdom of Heaven and

all things shall be added unto you という一節に心をうたれた。私はこの一節をよくよく思案し、明らかにしようと祈りを捧げた。」

或る日、彼が畑の仕事の間に祈っていると聖霊が現われて、同じ一節を彼に告げた。

彼は何才のときであったかを述べていないが、自供書に出てくる三つの年月、1825年、1828年5月、1830年から判断すると彼が十代半ばを越えている頃らしい。天の声を彼が耳にした最初の経験である。そこで、グレイは聖霊とは何を意味するのか、と尋ねている。これに対してターナーは、それは昔、予言者達に語りかけたのと同じ霊である、と答えている。

「私は非常に驚いて、許されるかぎりの時間を見つけては、2ケ年の間、断え間なく祈りを捧げた。」

この2ケ年の間に、同様の出来事を体験し、彼は遂に自らを扱われたる者、自分一人の力ではもはやどうにもならぬ力にとらえられてしまった、と自覚するに至る。

「私は全能の神の掌中にあり、何か偉大な目的を遂行するよう運命づけられている、という自分の感覚印象を十分に確認させられた。」

それから数年が流れ行くが、その間に生ずる事は彼の確信を強くさせるものばかりであった。彼は他の仲間の奴隷達に彼の体験を話して、判断の手がかりを求めているが、誰れもが彼の体験を信じ、そうした「彼の知恵」は神から伝授されたものだ、という仕末であった。こうした中で20才を越え、25才になった頃、彼は彼の父が為した如く、奴隷農場より監督のすきをうかが

って逃亡する。そして30日ばかり森の中にひそんでいると、聖霊が現われて、元の農場へもどれと命ずる。

「私がもどって来たのは、聖霊が現われていうには、私は天国にはなく、地上に多くの願いをもっている。だから、地上の主人のところへもどって、その主人につかえるがいい。For he who knowth his Master's will, and doeth it not, shall be beaten with many stripes and thus has I chastened you. と警告された。」

彼は単に奴隷制度を維持する南部諸州の農場より北部やカナダに逃亡して自分一個人の身の自由を手に入れる、という解決によって、事をすませる運名にはなかった。彼は恐らく彼自身、逃亡よりも奴隷制度の担い手である白人奴隷主への大がかりな挑戦をもくろんでいたのであろう。それが宗教的意味での理由づけを伴って強化されたらしい。「奴隷の身で他の人につかえることなどあるまい」と考えていた他の奴隷達は、逃亡先から、わざわざもどって来たターナーを非難した。彼は他の奴隷達には今や軽蔑の眼で見られる変った男奴隷となってしまっていた。神の声に従っていたターナーは現実とのギャップにいささか窮していたかも知れない。1825年、彼が25才の時らしい。この年、彼は幻を見る。

「私は幻をみた。白い天使と黒い天使が相争い、日は暗くなり、天には雷鳴がとどろいて、血は奔流の如く空に満ちた。そして私は声を聞いた。Such is your luck, such you are called to see, and let it come rough or smooth, you must surely bare it.

彼はこの恐るべき体験を経て、自分に定められた運命に全身を投入する決意を固め、ますます他人との接触をさけ、真実の信仰体験に浴せんと心がけ

るようになる。彼はこの段階で、彼の体験を聖書的に解釈し、彼の見た幻を「最後の審判の日」が近づきつつある前兆をとらえる。

一度、終末観でものを見、生活を考え始めると、心はその方向に向い勝ちである。宗教的発想、非経験論的にもものを判断する傾向の強い世界で、ターナーの如く、非凡な頭脳を宗教的発想にフル回転させ、また奴隷としての抑圧状況に深く秘められた怒りを持って緊張度の高い感情状態にあれば、奴隷状態にある仲間に対する使命感も加って、極めて制限されたワクの中ではあったが、使命遂行の手がかりを必死にさぐることになったに違いない。天から声が聞えたり、大空に血が満ちるのは、精神が異常に緊張している証拠である。最後の審判が近づきつつある、と感じて暮す中で、彼は「天にいる我を見よ」という声を聞く。大空には雲間から光が輝いている。ターナーにとって、これが救世主の、光り輝く救いの手と映じた。それは決して不思議な解釈ではない。非科学的 (*unscientific*) な体験と無科学的 (*nonscientific*) な体験には区別があってしかるべきで、R・M・ウィリアムズ R・M・Williams も「若し人が、X線を見たといひ張るなら、彼を診断のため、精神病理の専門家のところへ送ることが出来るが、若し彼が、心の救済を得た、と主張した場合、我々はこれと同じ方法で彼の主張を検討することは出来ない。^(a)」また、「救済と同じく神聖性というものは直接観察し得ないものであるが、これらは人の言動に差異を生ぜしめる。つまり、人が自分は『救われた』という時、我々は彼の行動に変化が生れているのを観察し得る。^(b)」ターナーは素朴な、従って強力な、終末観と激しい使命感に襲われる如く、祈り、天の様子を見み、仕事していた。

「その後しばらく経ってからであるが、畑で仕事をしていると、天より降った滴のような、血の露が穀草についているのを発見し……森の中に行くとき木の葉に象形文字のようなものと、それに……様々な姿をした人影が木の葉の上に血で形どられて、数字と共に現わされているのを見つけた。」

このあたりになると原始宗教的というより、狂信的であるという感が生じなくもないが、それは血が降る、という事態が不気味なためであって、前節Ⅴで引用した奴隷説教師の胸に押された焼ゴテの跡や、切断された足の指には血の描写がないので、受ける印象に凄みがなく、恐しい気又は狂った気がしないにすぎぬ。雲間から下界へと照り注ぐ日の光を、救世主が差しのべられた、救いの手と見るのと同じ次元のものである。

ターナーは、この血と人影の意味を次の如く納得する。

「キリストの血はこの地上でかって流され、罪人を救うべく昇天された。そして今や滴の形をとって再びキリストの血が地上にもどって来た。」

「木の葉には私が大空に見た様々な姿をした人影がうつっているから、それは人の罪のために背負われたくびきをキリストは今やおろそうとしておられる。」

この二つはターナーにとって「最後の審判の日が近づきつつある」ことを意味した。

そして3年の才月が流れた。

「1828年5月12日に、空で大きな音がするのを聞いた。同時に私に聖霊が現われていうには、悪魔が放たれ、キリストは人間の罪のために背負われたくびきをおろされた、そして、初めの者が終りになり、終りの者が初めとなる時が急速に近づきつつある、お前はこの戦いをひきうけて、悪魔と戦うべきだ、と。」

何時、この偉大な仕事を手がけるべきか、天よりしるしがあるまで、人に

語ってはならぬとされた。

「そのしるしが現われると、私は身を起し、準備をととのえ、敵を、その敵の武器で殺害することになっていった。」

この天よりのしるしは1831年2月、日蝕となって現われる。そこで彼は信頼を置いていた4名の奴隷仲間に、彼の手がけるべき仕事を打ちあけることになる。

トーマス・グレイが取ったターナーの自供からは、悪魔と敵が具体的に何を指すかは直接には述べられていない。ターナーが語らなかつたというより、グレイが尋ねるのを差しひかえたか、書かずにおいたかのいづれかであろう。悪魔は奴隷制権力、奴隷制度、および奴隷制度を維持する白人であつて、敵はこれらの担い手、白人であることは明白である。彼は白人に対する個人テロの行為に出ているのではなく、黒人を17世紀の初頭、奴隷としてアメリカ大陸につれ込んだ、白人の暴力と暴力制度を否定するための暴力を使ったのであつて、キリストが再臨し、また神の裁きの日、即ち最後の審判の日が来る、という考えは、窮極的には暴力の存在しない世界を、単純ではあるが理念として設定している。キリスト再臨による至福千年が、最後の審判の日に先立つのがキリスト教の普通一般的な考えであろうけれども、ターナーのものはこれと異っていてもさしつかえあるまい。彼は一人の扱はれたる聖徒として、悪魔と戦う使命があると信じていた。そして、彼は奴隷制度という現実と徹底した戦いを演ずることによって、キリスト再臨、最後の審判の日、といった人間の現実的願いから出発した宗教的発想を幻想に終わらせることを阻止した。宗教精神の面から見れば、これは一奴隷説教師、ナット・ターナーの残した輝しい批判的業績なのであり、奴隷解放の歴史からすれば、合衆国の経済、政治の史的展開を待たねばならなかつたにせよ、体制

にひびを入れるには人間の行為なしにはあり得ない以上、彼の行為は人間不正、人間を非人間化せんとする制度を破壊する、自己解放の歴史の上に消えることのない灯を点ずることになった。

キリスト教においては、信仰の強度は宗教セクトと教会を両極においた連続体の上において検討するが出来る、と社会学者、チャールズ・P・ルーミス Charles P. Loomis は指適する。彼はラッセル・R・ダイネス Russell R. Dynes の研究、“Church-Sect Typology and Socio-Economic Status” (1955) (*American Sociological Review*, Vol. 20, No. 5 収録) をもとに興味ある例を上げている。

「聖書に書かれているあらゆる奇跡は実際起るものである。」また「天国と地獄は私には非常に真実味のあるものである。」という二つの内容に対して、宗教セクトに属するものは同意を示し、教会に所属するものは同意しない傾向にある。セクトが救済という目的に比重を置くのに対して、教会は他の諸社会制度の目的が教会の持つ目的に影響を及ぼすのを許す。つまり、前者が社会的にも宗教的にも非妥協的であるのに対して、後者は社会的にも宗教的にも妥協的である。

アメリカの場合、白人教会が奴隷制度、黒人差別に妥協して来たことをこれはよく説明する。また、R・M・ウィリアムズはセクトや「新しく創り出される宗教はそれが抬頭するところの社会秩序から特に離反しているか、普通はそれに対立するものである。事実、そうした宗教は世俗・秩序の中央支配部に対する直接攻撃から、不満の狙いをそらせるようにせねば、それは往々にして可能であるが、社会体制の利益に対して常に危険物である。」と法と秩序の立場から指適している。これは法と秩序が支配と被支配の関係にもち込まれると、特にその感が強くなる。一方の側にとって危険物であるものは他の側にとって変革の力となる。W・スタイロンがターナーの宗教に見るのは変革の宗教という「危険物」なのである。彼はどのようにこの危険物の解体処理を行うか考えてみよう。

- 註 (1) Benjamim Quarles, *The Negro in the Making America*, (New York, Collier Books, 1968), p. 91.
- (2) E. Franklin Frazier, *Black Bourgeoise*, (New York, Collier Books, 1962), p.p. 33-34.
- 1850年、南キヤロライナ州チャールストン市の700名(男子)の自由黒人被雇者のうち技術工の職種に入るものは次のようなものである。
- 大工(122名)、仕立人(87)、靴製造者(30)車輪製造者(14)、れんが職人(18)、畜殺業者(23)、ゴム長ぐつ製造者(10)、工場機械工(14)、塗装工(11)。
- 建築、れんが製造、家具製造、石工、室内装飾、といったヨーロッパ移民と競争することになる職業には自由黒人はみられず、彼等の大部分は家事関係、或はサービス関係の仕事にたずさわっていた。
- (3) Robin M. Williams, Jr., Chapter IX Religion in America, in his *American Society, a Sociological Interpretation* (New York, Alfre, A. Knopf, 1963), p. 325.
- (4) *Ibid.*, p. 324.
- (5) Charles P. Loomis, Religious Social Systems in his *Social Systems, Essays on their Persistence and Change*, (New York, D. Van Nostrand Company, inc., 1960) p.p. 172.179.
- (6) Robin M. Williams, Jr, op. cit., p. 331.

VII

この小説の I Judgment Day は IV “It Is Done……” で完成されるもの予備段階に当るものだが、ここには表裏一体となった、二つの意図が秘められていて、これをもとに作品が展開される。

一つは、ナット・ターナーから彼の力の源泉となった神を奪う。他の一つは、この神を奪われ、空洞化した彼の心に、白人女性を聖なるものとして占めさせる、という意図である。

この二つの意図を表裏一体となったものにするのは、白色人種優越主義を中核とした白人文化であって、これにナット・ターナーを十分に侵蝕させておくことによってのみ、それは可能なのである。

この小説は、白人女に対して黒人男が常にいただいているに違いない、とW・スタイロンをも含めた白人社会一般が、人種偏見に禍いされて思い込んでいる、性の欲望、願望なるものが、執拗な筆致で露呈されている。

これは現代アメリカ社会の精神不安の一つをも示すものであろうが、黒人が誇りとする民族解放史上の英雄、黒人説教師ナット・ターナーを一白人少女、マーガレット・ホワイトヘッドの前に屈伏させ、彼女を通してのみ、一度見失った神を再び見出し、心の救済に浴し得るよう仕組む上で、暴露された白人の黒人に対する、白色人種優越主義そのものが生むセックス不安である。この不安は精神病的にどんな作用を精神感情に及ぼすかは、ここでは問題ではないが、黒い力に恐怖する白人社会つまり、黒い力によって白色人種優越主義が崩されるのを恐れる社会を土壌に生まれた小説、それがW・スタイロン作成のナット・ターナーの告白なのであるから、白人の恐怖が様々な形をとって随所に現われるのは不思議ではあるまい。

ターナーから神を奪い、白色人種優越主義(以下、人種主義とする)をもとに彼を先天的に臆病な黒人に仕立てる作業をみよう。

1831年のターナーの自供動機に関しては、この自供を書き残したトーマス・グレイは何も述べていない。

W・スタイロンはこの自供動機を設定し、それをターナーの即物的、生理的報酬要求にしている。それは、彼を縛っている鎖、手枷、足枷をゆるめてもらって背中⁽¹⁾の耐え難いかゆみに何んとか手がとどくようにしてもらいたい、というもので、極めて単純であるようにもみえる。ところが、このかゆみには特異性がある。

これを生じさせる傷は、彼が捕えられて獄舎へと引き立てられて来る途中、二人の白人女が、ハットピンで幾度も憎しみを込めて刺し込み、作ったものである。この白人女の手で加えられた傷のかゆみは彼を「どうすること

も出来ない、一種の色情感、肉欲のとりこ⁽⁸⁾にさせた。このかゆみを満足させる、それが自供動機とされるが、ターナーは巧みにこれを隠して、嘘言を吐く。つまり、神に命令をうけたので、一切を自供する、とグレイに告げ、自供し易いように、少し鎖りと枷をゆるめてくれ⁽⁴⁾、と訴える。

これは、1831年のターナーの自供に残されている宗教的真相を、信びよう性のないものとして葬り去らんとするものである。

このスタイロン製の動機が真実味を帯びる効果をあげているのは、鎖で縛られた黒人男の背中に、白人女の手で加えられた生傷が生む欲情的かゆみ、というマゾヒズム的動機の設定にあり、これはスタイロンがよくとらえた、アメリカの感情の底流にある、黒人の存在に由来する歪んだ感覚があるためであろう。

ターナーは神の命令によって自供する、と嘘言を吐くに値すべく、神に見放されてしまっている。

まず彼の側から、祈りを捧げる力が抜け去っている。そして彼は「神と自分の間に拡がっている深淵を渡るすべもなく………恐しい程の虚無感⁽⁵⁾」にとられていて、時に浮んで来る祈りの文句もとらえようがない。祈りの文句を口にはさむと、自然に間違えてしまう。もう彼には関係がなくなっている。神から非常にへだたってしまったという孤絶感は絶望的に深いもので、「ぞっとするような永遠の暗がりのもとに、岩の下でうごめく虫けらのように、見捨てられたまま生きた方が、これほどまで神から離反してしまったと感じなくてすんだであろうに。」⁽⁶⁾と思われた。

これは目覚めている間に襲ってくる虚無感、絶望感、無力感のみに終わらない。眠れば、悪夢となって恐怖感が襲ってくる。

真夜、一人で沼の端を歩いている。青い稲妻が遠くに光る。沼には湿気がたちこめ、風もない夜である。彼は恐怖にうたれて、必死になって聖書を探しているが見つからない。この沼地のどこかに置き忘れていた管なのだ。だんだん深みに入ってさぐるのが見つからない。突然、人の叫び聞える。見る

と黒人の子供達が沼にのまれて助けを求めているのだ。だが、彼は動けない⁽⁷⁾。
…。

彼は反乱の罪で処刑台で死ぬことを予想している。死ぬことは恐しくない。だが、神に見放されたまま死ぬのが恐しい⁽⁸⁾。

彼はグレイに聖書の差し入れを依頼し、神への手がかりを求めんとする。だが聖書は与えられない。

グレイは彼から自供書を取り、必要部分である事件経過の報告を法廷で終えた後、情容赦なくターナーを攻撃する。

まず、天文学の知識を誇示して神の存在なるものを否定し、ターナーを沈黙させる⁽⁹⁾。

次いでキリスト教が悪の根源になっていると批判する。これは奴隷制度を維持して来たばかりか、人種間の抗争を温存した。ターナーの虐殺事件そのものを生んだのみか、その結果、多くの黒人が処刑され、また虐殺されたのもキリスト教徒のやったことだ、またターナーの行動は奴隷制度廃止の努力をして来たクエーカー教徒の苦労を無にしたのも皮肉だ、と⁽¹⁰⁾。

自供させられた後で愚弄されるターナーのことを読むのは白人の期待感情を満足させるものであろう。

グレイの批判に、ただおどおどと聞いていたターナーは、神を求める絶望的な試みを放棄しかける。

「多分……自分が為したことは神の眼から見ればよからぬことであったかも知れぬ。多らく彼(グレイ)は正しいかも知れぬ。神は死に去ったのだらう。だから、自分はもはや神にすがることが出来ないのかも知れない……」⁽¹¹⁾

ターナーから神を奪う仕事をグレイが行うが、彼の秀れた才能を鈍愚の代物に化しめ、さらに彼を白人の前でおろおろする穴グマの如き奴隷に仕立てるのに、ゼレミヤ・コブ Jeremiah Cobb (彼はターナーに死刑判決を言い渡した判事である。)が登場する。これはターナーの回想の形で現われる。

ターナーは⁽¹²⁾の聖書解釈でコブに圧当され、窮するのみか、賢明な奴隷であ

るという評判を確かめるべく、スペルのテストを強制される。「御主人様、どうか私をなぶりものにしないで下さいませ、お願いでございます。」と訴えるターナーの願いは聞き入れられない。彼は屈辱感に血を逆上させながらネコという字を綴り、白人男の力の前に絶望する。

こうした汚辱にみちた回想の中に、一人の白人少女が彼の心を洗うかの如く現われて来る…。

ターナーから神を奪う試みがなされる中で彼は白人男によって、黒人の男らしさも奪れていることに注目しなければならない。この力としての男性の除去はターナーをホモセクシャルの性癖を持つ変態者に仕立てて、その少年時代を描いている点に如実に示されるが、まず、何故、彼から神を奪わねばならぬかである。

先に述べた如く、ナット・ターナーは奴隷説教師として、宗教的発想と信念にもとづいて奴隷反乱を起し、これを指導した。彼は同時代のジョセフ・スミスの如く教祖となる方向に向わなかったし、一奴隷説教師で終ることもならなかった。それは彼の宗教が現状変革を要求するものであり、しかも、非妥協的にそれを行わんとするものであったためである。彼は自供書を残しているにすぎぬが、非常に恐れられた説教師であるのは、彼が残した行動にある。その精神は南北戦争が始まるまで続いた。1843年ニューヨーク州バッファロー市で催された第九回黒人全国大会で、黒人牧師、ヘンリー・ハイランド・ガーネット Henry Highland Garnet (1815—1881) は奴隷達にターナーの如く反乱を起せと呼びかけた。彼は *An Address to the Slaves of the United States of America* (1843) で、奴隷制度は黒人をアフリカから盗み取った人間泥棒制度であり、神と人間に対して犯された最も大きな罪である、従って、これに身をゆだねることは最も罪深い行為である、「お前達の父の身に残った鞭の跡を忘れるな。お前達の気高い母が苦しめられ、恥かしめ

られたことを思い出せ、美德と純潔を願いながらも、めかけにされ、人間の姿をした悪魔の肉欲にさらされている、呪われたお前達の妹のことを考えよ。」⁽⁴³⁾

「血を流さずに罪の贖い是有り得ぬことを記憶せよ。……奴隷として生きるよりもむしろ自由人として死ぬ。」と訴えた。⁽⁴⁴⁾

これがナット・ターナーの反逆が伝統となって宗教の中に残った一例である。しかし、この反逆の伝統は J・H・コーン James H. Cone も *Black Theology and Black Power*(1971) で指適しているが、南北戦争以前の黒人宗教及び教会に存在するだけで、この後は教会は社会的逃避の場と化して行くばかりか、『白人権力構造の甘言とわいろに屈服して、その引き立て役になった。』自由への情熱は、飲酒とダンスと喫煙を禁止する無害な説教によって代わられた。そして現存する不正は、この世を越えた天国を待望することによって軽視された。黒人教会は、その大部分が、白人宣教師の神学を採用し、……黒人牧師は……白人権力構造と被抑圧者である黒人との間の連絡係であり、黒人社会ではすべてがうまくいっていることを白人に確認させる二重構造に奉仕し、黒人にあった自由の精神を弱体化した。⁽⁴⁴⁾

この宗教的麻痺にショックを与え、黒人差別制度に抵抗を示す時期が訪れたのは1950年代の中頃の南部である。「必要とあれば暴力に直面せよ、しかし暴力で報復することを拒否せよ。」というマルチン・ルーサー・キング Martin Luther King に代表される、非暴力抵抗運動による宗教精神の社会的復興がそれであった。この運動は1960年代の初にピークに達するが、この時期に、白人権力社会の暴力による鎮圧が開始され、60年代後半の黒人大暴動の時期を経て、ブラック・パワーの時代が来る。これは黒人教会にも反映される。

「宗教は白人の道具であった。今こそ教会は真実のキリスト教なるものにもどらねばならぬ。」という声、白人からの分離を主張する牧師、黒人霊歌をアメリカ・フォーク・ソングからはずせと要求するメソジスト派の牧師、所謂、Black Schism が高まる中で宗教界でも暴力肯定の声が生じ始めた。⁽⁴⁵⁾

ブラック・パワーの抬頭と共にアメリカ宗教の中に流れている、社会的不

正に対するに実力をもって挑む精神がうごめき始めている。ナット・ターナーはこの意味で象徴的危険物なのであろう。

注 W. スタイロンのこの作品、*The Confessions of Nat Turner* は New York の Random House 社 The Modern Library 版による。引用箇所は頁数のみを掲げることにした。

- (1) p. 13.
- (2) p. 22.
- (3) p. 15.
- (4) p. 16.
- (5) p. 8.
- (6) p. 10.
- (7) p. 76.
- (8) p. 79.
- (9) p.p. 110-111.
- (10) p.p. 112-114.
- (11) p. 115.
- (12) Henry Highland Garnet, *An Address to the Slaves of the United States of America*, in Sterling A. Brown, Arthur P. Davis, and Ulysses Lee eds., *The Negro Caravan*, (New York, Arno Press and The New York Times, 1969), p.p. 604-605.
- (13) Stephen B. Oates, *To Purge this Land with Blood*, (New York, Harper & Row, 1970), p. 60. *The Negro Caravan* には Garnet の演説の抜萃が掲げられているので、Oates の引用も利用した。
- (14) J. H. コーン著、大隅啓三訳『イエスと黒人革命』新教出版社、187~188頁。
- (15) *Newsweek*, march 4, 1958. p. 57.
- (16) デトロイトで開かれた The National Council of Churches 主催の会合で、「人種主義と貧困問題を攻撃する有効な手段としてキリスト者は暴力を容認すべきである。」と主張する代表者があった。またスエーデンで催される世界教会会議(The World Council of Churches)で「政権を変えるための革命行動が正義に基づく社会秩序に達する唯一の道であるような情況がある。」という提案の討議がなされることになった。

「人間が他の人間に加える悲惨な境遇はそれ自体暴力形態を取っている。」とポール、シヤボニュー神父は革命を支持している。

カルフォルニア州セレスト・メリー大学神学教授ピーター・リガは、グアテマラの人口の僅か2%を占める者が80%の国の富を所有している点を指適し、「グアテママの人々の唯一の望みの綱は彼等を抑圧している社会を転覆させる暴力革命以外にない。」と主張している。以上、*Time*, march 15, 1968, p. 52.